

# 和歌山県

有田振興局 農林水産振興部林務課  
足立 絵 里 子

## 有田地域における林業労働安全対策の取組について

### 1 テーマの趣旨・目的

和歌山県有田地域は、有田川流域に位置する有田市・湯浅町・広川町・有田川町の4市町からなり、温暖な気候を生かした柑橘類の名産地である一方で、上流域では人工林が多く適切な森林整備の推進が求められている。

令和元年度から始まった森林環境譲与税の取り組みでは、地域の状況に応じた取り組みを実施できるよう、巡回指導等を通じて事業内容の相談に乗り、市町への伴走支援を行ってきたところである。

今回紹介する林業労働安全対策の取り組みは、令和4年度から始まり本年度4年目を迎えるが、継続支援するなかでの実感や課題等の気付きがあったので、今後の在り方を検討するために整理して紹介する。

### 2 現状及びこれまでの取組の成果・課題

#### (1) 取り組みのきっかけ

令和3年度当時、各市町では森林環境譲与税（以下、譲与税）の取り組みが軌道に乗り出し、特に森林整備事業は取り組みの中心として、今後より一層、増加が見込まれる状況であった。

一方で、県内では林業現場で死亡事故も発生しており、森林整備事業の増加に伴って労働災害が発生することも懸念されたため、当林務課では、林業事業者がより安全に事故なく施業に取り組めるよう、対策が必要と考えていた。また、林業事業者側でも森林整備の新たな担い手確保を図るなかで、死亡事故を起こす事業者は就業先として選ばれにくいとの認識を持っており、労働安全への関心が高まっていた。

このような状況のなか、まずは林業事業者や現場従事者に対する啓発が必要であると考え、市町と連携した労働安全対策として、研修会実施に向けた取組がスタートした。

#### (2) 取組内容・成果

##### ①市町への働きかけ

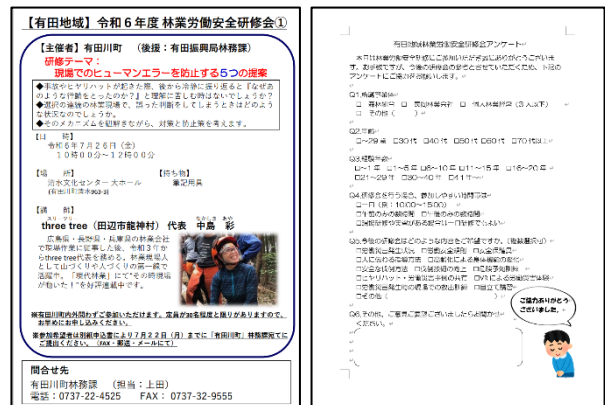
有田地域4市町のうち、山間部に位置する広川町と有田川町では森林整備が必要な人工林が多く、地域の森林組合、林業事業者が担い手となり、譲与税を活用した森林整備事業のほか、搬出間伐や皆伐事業等に取り組んでいる。林務課ではこの2町における働きかけが重要と考え、譲与税を活用した研修会の開催に向け担当課へ働きかけを行った。その結果、取り組みに賛同いただき、翌・令和4年度から事業として実施することとなった。

##### ②労働安全研修の実施体制

研修会は、次のとおり役割分担を決め実施している。

- ・ 実施主体：町
- ・ 開催内容の決定・講師との調整：林務課
- ・ 現場研修の開催場所選定：林務課(事業者へ相談)
- ・ 座学会場手配：町
- ・ 開催案内：実施主体(一部、林務課が協力)

なお、令和5年度研修会から参加者への事後アンケートを実施しており、次回研修会での内容の要望等を確認し検討材料として活用している。



資料1：R6 有田川町研修会の案内・事後アンケート

## 別紙 4

### ③研修会の開催結果

【令和4年度】

有田川町・広川町

安全に配慮した伐倒技術の習得を目指し、県農林大学校林業研修部で指導を行う千井氏を講師に迎え、搬出間伐・切捨間伐の各現場で選木の考え方、安全な伐倒手法、実践的なかかり木処理等について学ぶ研修を実施した。開催場所でテーマ（搬出・切捨）を分けることで、参加者が受講したい研修を選んで参加できるよう配慮した。



写真1：R4 有田川町研修会の研修風景

【令和5年度】

有田川町

地元消防署の職員を講師に迎え、労働災害発生時に迅速に対応するための救出手順や応急処置について研修を実施した。応急処置では、林業現場で想定される切創出血時の止血方法、骨折時の応急処置などについて、実際に三角巾を使った手法などを体験しながら学んだ。

広川町

田辺市を拠点に森林整備を担う、three tree 代表 中島彩氏を講師に迎え、「安全装備・身体機能・刃の状態を再チェック」をテーマに研修を実施した。身体機能のチェックでは、計測実習で参加者が自らの身体機能の変化に気付き、年齢とともに体力が低下していることを認識する大切さが伝えられたほか、伐倒時の体力消費を軽減することにも繋がる実践的なチェーンソー目立て講習も行われた。

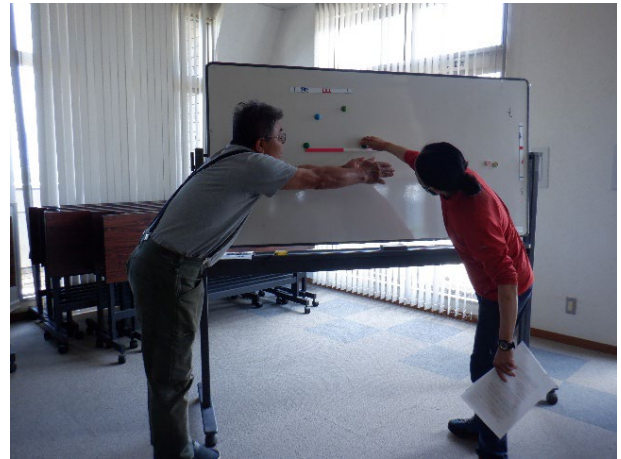


写真2：R5 広川町研修会の研修風景

【令和6年度】

有田川町

令和5年度の研修後アンケートでは、「人に伝わる指導方法」を内容とする研修実施の要望が多く寄せられた。

チームで作業を行う林業現場においては、安全で円滑に作業を行うためのコミュニケーションが欠かせず、新規就業者を迎えた林業事業者では、特にこの課題に直面していることは想像できたが、アンケートだけでは「どのような内容を伝えることに課題を感じているか」が明確に汲み取れず、具体的にどのような研修内容とするか決めかねた。

そこで、前年度に研修会の講師としてお世話になった three tree 中島氏にご相談し、要点を整理して共に検討したところ「伝えたいことが正しく伝わらない・誤って伝わることを防ぐ」ことがまずは重要との結論に至り、中島氏を再び講師に迎えて、研修会を開催することになった。

研修では、ヒューマンエラーやコミュニケーションエラーが起こる仕組みを学び、

- ・ エラーを起こしやすいタイミングを知り、気を付ける意識を持つこと
- ・ 伝達ミスはなくすることが難しいからこそ、その影響を最小限にするために分かりやすいコミュニケーションを心がけること
- ・ 具体的には、仕事で使う共通言語の再確認、言葉だけに頼らず図解・イラスト等も活用して伝える工夫をすること

など、中島氏が実践している取り組みが紹介された。

参加者からは、取り組みを実践してみたいとの意見も

## 別紙 4

あったが、事後アンケートでは引き続き「人に伝わる指導方法」の希望が多く見られ、今後も参加者のニーズを把握して取り組みを継続することが必要と感じた。

### 広川町

「チェーンソーによる伐木等作業の安全に関するガイドライン」では、林業作業中の下肢切創事故を防ぐため、安全な履物の着用が義務付けられているが、傾斜地では歩みにくい等の理由から、有田地域ではチェーンソーブーツではなく従来の地下足袋を着用している現場従事者も多く、扱いやすく安全性が高い履物の普及が求められている。

令和6年6月、紀伊半島3県共同研究実行委員会（和歌山県、奈良県、三重県）が主体となり新規開発に取り組んだ「チェーンソー防護安全地下足袋」が発売されるとの情報をうけ、当該商品の試着会と2部構成で研修会を開催することとした。

研修会では、まず県庁担当者より安全装備の必要性について、事故が起こった場合の会社負担の事例等を交えた説明があり、経営面から考えても決して無駄な投資ではないことを参加者に伝え、試着会に向けた意識づけとした。

試着会には、有田・日高地域の森林組合から現場作業従事者など26名が参加し、試着した参加者同士で盛んに意見交換が行われた。主な意見としては、

- ・ 地下足袋より重いため、慣れるまでは歩行するだけで疲れそう
- ・ スパイクがあり傾斜地でチェーンソーブーツより踏ん張りがきくので、現場によって使い分けも考えられる
- ・ 地下足袋より高額だが、1年もつなら悪くない
- ・ 地下足袋と同様、スパイクピンの耐久性が気になるなどの意見が聞かれ、製品への評価は悪くないものの、耐久性や現場での使い心地は、一定（あるいは長期）期間試着したうえで評価してもらうことが望ましいと感じた。

### (3) 課題

令和4年度から継続して林業労働安全研修会を実施してきた中で、特に研修内容の検討方法や、実施後のフ

ォローアップについて課題と感じることが多くあった。

まず、研修内容の検討では、アンケート結果だけに傾倒せず、林業事業体への事前の聞き取り調査や、研修会実施後の参加者との意見交換等を実施し、課題になっていることを整理し、明確にする必要性を感じた。

また、研修会で学んだ内容の定着具合の確認や、効果の検証なども実施し、今後の研修内容にも反映できることが望ましいが、その手法も含めて今後引き続き検討が必要と感じている。

## 3 今後取り組むべき内容

今後も、林業労働安全研修会を継続して実施していく場合、林業事業体での理解度、定着具合を確認しながら計画的に実施することも必要と考えられる。例えば、

- ・ 労働災害発生時の対応（救急への通報手順・怪我の応急手当等）は新規就業者がいることも想定し、数年ごとに繰り返し定着を図る。
- ・ 意思伝達・コミュニケーションに関する研修では、最終目標を決めて数年スパンで習得できるよう少しずつ取り組む。
- ・ 安全装備や機械・機器に関する研修会では、導入を検討すべき新製品が出てきたタイミングにのみ単発で実施する。

など、研修内容に応じた適切な頻度を考慮して、実施することが想定される。

また、定着具合の確認や効果の検証の手法については、県内の他地域や他都道府県での事例等から学び、より地域に適した方法を模索していきたい。

今回、森林環境譲与税を活用した林業労働安全対策の取り組みとして、研修会を通じた啓発活動を紹介した。この取り組みは、専門性の高さ故に、林務課が中心となって企画・実施に取り組んできたが、取り組みを通じて市町の担当者の意識啓発にもつながっていると感じている。譲与税の取り組みはまだ始まったところであるが、今後も地域の課題解決に向け、市町と連携して取り組みを行っていきたい。